

教育現場の今

センター協力研究員（草加市立青柳中学校教諭） 石田 和 朗

堺屋太一氏の著書の通り、確かに「時代が変わった」。社会のこの大きな変化に学校が無縁でいられるはずがない。21世紀の学校を考えると、新学習指導要領が示した方向は、私には妥当なものに思える。

学力低下を指摘するいろいろな論は、うなずける点もあるが、これからの学習像を示すものではない。今までのやり方で通用するとはとても思えない。問題はこれからをどうするか、なのである。

一方、新学習指導要領が現場にどれだけ受け入れられているかを見てみると、率直に言って、あまり歓迎されていない。特に目玉といわれる「総合」と「選択」が現場に困難さをもたらしている。趣旨には賛成でも、条件整備がなされていないからである。現場、特に中学校はいわゆる生徒指導と部活動に追われている。余裕はほとんどない。「一斉」から「個」へ、「教え込み」から「自ら学ぶ」へという転換は、教育の質的なレベルアップを図ろうとするものであり、「意識の転換」だけでできるものではない。全面実施に合わせて、学校にたった1人(できたら2人)の教員を増員してほしい。そうすればこの新しい教育ははるかに進めやすくなる。

私は、文部科学省の「勇気」に感心している。これほど大きな教育改革を、大した条件整備もせずに、現場はなんとか進めていくと考えているのだから。現場の力をそれだけ信じているのだろう。確かに今まで学習指導要領が改訂されたとき、現場は実態に合わせて、「やれる方法」で対応してきた。そう混乱もなかったが、そう変りもしなかったのである。

今回も現場はなんとかしていくであろう。ただし、それはあくまでも「やれる方法で」である。例えば本校は4クラスに対して、「選択」では今までは6人の先生を配置してきた。しかし今回「選択」が大きく増えたため、4人もしくは5人の先生で対応する。「総合」も移行期間中は4クラスを6ブロック(自然、社会、身体、芸術等)

に分けていたが、5ブロックに減らす。こうした対応の中でそのねらいがどこまで達成できるか。ペースダウンは止むをえないだろう。

上で述べたように、私は今回の学習指導要領の方向は支持したいのである。しかし実践は容易ではない。本当に「個性を生かした」教育を行おうとするなら、ぜひ条件整備をすすめて、現場のやる気を高めて欲しい。

最後に本校の取り組みの様子を「草加市教育研究会紀要まとめ」より記す。悩みと努力を読み取って頂ければ幸いである。

生きる力を育む教育課程のあり方

一 教科学習と総合的学習の有機的連携を探る一

本校では今年度、以前ご指導頂いた市川伸一東大教授の学習サイクル理論を支柱として、上記の研究テーマを掲げ、新しい課題に挑んだ。3年目に入った総合的学習の研究の改善を図るとともに、学校評価で「基礎学力」が学校課題として提出されたからである。

まず、習得サイクルを回転させなければならない。主として教科学習で身につける基礎基本である。各教科で学習スキルを明らかにし、精選しその定着を図った。同時に家庭学習の習慣化も目指した。もう一つの探求サイクルの中心は総合的学習である。本校の生徒テーマは興味・関心型であり、「自ら学び考える」態度や力のある程度は高められた。

2つのサイクルが回転し、相乗効果を生むことが本校テーマが目指すところである。伸びる生徒の「生きる力」は間違いなく育った。しかし、十分に育っていない生徒も少なくない。学校は全ての生徒に責任を持つ。そこで来年度は、「教師用総合指導マニュアル」と「生徒用総合的学習ノート」をつくり、指導しやすい「総合的学習」に変える。また研究の重点を「基礎的基本的内容」にシフトする。